



静岡聖光学院キャプテンの白鳥雅俊は試合終了後、安堵の涙を流した

「お前たちは、必ず花園に行ってくれ。」  
 昨年、県大会の準決勝で敗れた静岡聖光学院のキャプテンは、涙ながらに後輩へ想いを託した。  
 「俺たちは、絶対に花園に行きます！」  
 そう先輩たちに誓った日から一年。聖光ラグビー部は、高校ラグビーマンたちの憧れの地、近鉄花園ラグビー場を主会場にして行われる全国大会への切符をかけた、県大会決勝に臨んだ。  
 草薙球技場の芝生の上で、黒色のシャツを着た聖光の選手たちが肩を組む。聖光賛歌を高らかに歌い上げると、「絶対勝つぞー！よっしゃー！」と叫び、勢いよくスターティングポジションについた。  
 対戦相手は、ノーシードながら昨年準優勝の東海大翔洋、そして前年チャンピオンの浜松工業を破る快進撃を見せ、8年ぶりの決勝に進出した常葉橘。勢いを持って挑んできた相手を、聖光は試合開始から圧倒する。2分、スクラムから右サイドにパスを展開。最後はウイングの栗林昂太郎が相手をかわしながら駆け抜け、フーストトライを決めた。その後も、FW陣の体格を生かしたモールを形成。「徹底的に練習してきた」島田至隆監督というトレーニングの成果が実り、強固なモールからロックの葉室廉、フランカーの川井泰成がそれぞれトライを決める。23分にはラックの混戦から葉室がボールを持ち出すと、相手を背負いながらこの日2本目のトライを決めた。  
 FW陣の活躍で優位に立った聖光。

「得点を重ねても、いつ流れが変わるか分からない。先輩の想いも背負って、花園へ行くという僕たちの初心を忘れずにプレーしよう」とキャプテンの白鳥雅俊が声をかけ、22点差をつけて迎えた後半も、攻撃の手を緩めず容赦なく常葉橘を攻め立てた。  
 3分、相手バックスの裏へスタンドオフの浅井瑠加がキックパスを送る。それに反応し、走り込んだ栗林がインゴールで押さえてトライ。6分には右サイドで得たラインアウトからラックで押し込み、プロップ伊豆川洋輔のトライが成功。24分にもセンター川島恒陽がインゴールに飛び込んだ。  
 試合は聖光が攻め続けるワンサイドゲームになった。だが、常葉橘も最後まで闘う姿勢を貫いた。準決勝で怪我を負ったスタンドオフの舟山建太に代わって出場した望月裕士が気を吐き、聖光のタックルに何度止められても、トライを目指して果敢に挑んでいった。だが、最後まで聖光の厚い壁を破ることはできなかった。  
 「ラインアウト、スクラムといったセットプレーを制することを心がけた」白鳥と狙い通りに試合を進め、最終スコアは43対0。ノーサイドを迎えると、白鳥は安堵の涙を流した。  
 「先輩たちの悔し涙が、僕たちをここまで成長させてくれた。恩返しができるかなと思います」  
 県大会を圧倒的な強さで制した聖光の次なる目標は、全国大会でのベスト8。新たな戦いは、12月27日から始まる。



ノーサイドを迎え、健闘を称え合う選手たち。常葉学園橘キャプテンの望月裕士は溢れ出る涙をこらえることができなかった



第94回全国高校ラグビー大会静岡県大会  
11月16日(日)草薙球技場

# 静岡聖光学院 4年ぶりの花園へ!

—託された想い、果たされた約束—

静岡聖光学院 **43-0** 常葉学園橘